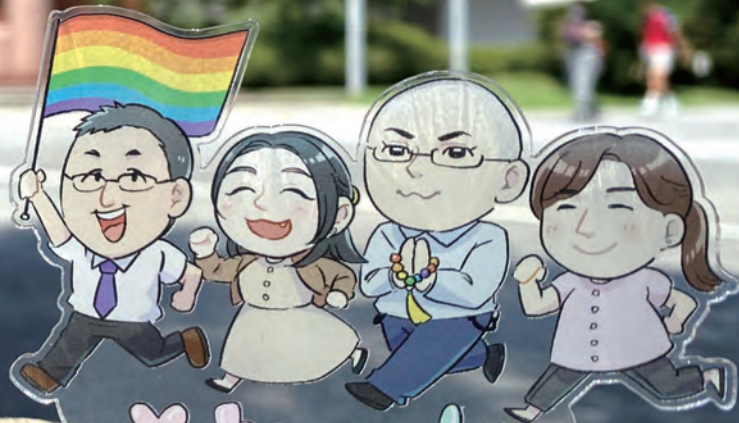




宗教部報

# リカージュ



それいけ!  
しゅ-ま-ぶ!

それいけ！じゃまぶる！

■ 宗教部へようこそ！



— 宗教部報 りゅうこく No.108 目次 —

巻頭言「苦楽をともにしてくれる仏さま ～一僧侶の臨終に想うこと～」	…………… 玉木興慈 ……	1
伝道部法話「どんなときも」	…………… 西居顕真 ……	7
深草キャンパスの自然 春～夏	…………… 部矢祥子 ……	10
龍大エッセイ『私もナスも紫ではない』	…………… 嶋田君晴 ……	14
連載「《イケズ》と《気遣い》のはざまで —京ことばの心髄にせまる—	…………… 泉 文明 ……	17
職員数珠つなぎ「菩提樹から遠く離れて」	…………… 野澤信孝 ……	20
仏教パズル	…………… (出題) 小川信正 ……	25
法要・行事の振り返り	……………	27
表紙写真解説「#ツナガルアクリルプロジェクト」	…………… 滋野正道 ……	35
BOOK GUIDE	……………	39
編集後記	……………	47
間違い探し	……………	

カラーマンガ作成 小西智子  
間違いさがし作成 保田正信

## 言 頭 卷

苦楽をともにしてくれる仏さま

〜一僧侶の臨終に想うこと〜



玉 木 興 慈  
(文学部長)

伝統ある宗教部報『りゅうこく』巻頭言のご縁を頂戴しました。部長を務めております学友会宗教局伝道部の学生たちによる朝法話の様子を、掲載していただき、感謝申し上げます。この度、真宗学科の一教員として、また一僧侶として経験した全くプライベートな事柄を書かせていただくことを、まずはお許し願いたいと思います。プライベートな事柄とは、父の往生についてです。父（玉木興乗）は、本学経済学部の創設時に、一番若手の教員として務めておりました。短い期間の奉職後、関西大学に移り、定年退職は滋賀大学で迎えました。その後二十五年ほどは住職に専念し、令和二年五月三日に往生させていただきました。以下は、親類に送った父の訃報の抜粋です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

昭和七（一九三二）年十月三日生まれの父は、今年の誕生日が米寿でしたが、五ヶ月早く往生を迎えました。

五年ほど前に、パーキンソン病の診断を受けて以降、リハビリと入浴介助で、週三日、介護の方にお世話をいただきながらの生活でした。

八十歳を超えてもしばらくは原付バイクに乗っておりましたが、運転免許更新を断念してからは、月参りや法事などの法務に出ることもなく、寺内の寺務を丁寧にしてくれました。

パーキンソン病の診断を受けた当初は、門徒の過去帖などに記す筆も弱々しかったのですが、お薬のお陰か、次第に、震えることもなく力強い字が戻ってりました。

歩行など歩く動作はゆっくりでしたが、ゆったりとした自分のペースで、身の回りのこともこなしておりました。

私の多忙の故、多くの時間を一緒に過ごすことができませんでしたが、たまに外出を誘っても、「僕は良いわ。留守番をしとくから行っといで」という返事ばかりでしたが、三月に、母の誕生日祝いに外食に誘うと、一緒に行くことができました。それが最後の外食となりました。

三月二十六日夜、翌日の門徒葬儀に向けて、白木に法名を記したところで、「裏はもう書けないわ。葬儀の法名も書けなくなったら、住職を譲らなアカンな」と言いながら、リビングのソファに腰を下ろしました。そのまま急に身体に力が入らなくなり、翌朝、かねてよりお世話になっていた病院に救急車で向かい、入院の手続きとなりました。

救急車には姉が同乗してくれましたが、車内で、名前や誕生日なども自分の口で話すなど、意識もしっかりとしていたようです。

入院中も、入院前と変わらず、毎日三度、自分で食事をする事

もできておりました。

一週間ほど経つと、担当医から、「私どもの病院は急性期の病院ですので、次の病院や施設を探し始めてください」と言われました。病状が落ち着いていることは安心でしたが、新型コロナウイルスの事もあるので、転院等については、私たち家族も慎重になっていました。幸い、担当医もその辺りには配慮してくださったので、その後もあまり急かされることはありませんでした。

四月七日に最初の緊急事態宣言が発出され、直ちに、家族の面会もできなくなりました。

姉が特に頻繁に病院に通い、着替えの授受をしてくれましたが、父の病室には入れずに、看護師さんを通じての授受でした。残念なことでした。着替えと一緒に新聞を同封していましたが、見出しだけがも知れませんが、最期まで読んでいたようです。

新型コロナウイルスのことを理解し、家族の面会もできないこともわかってはいましたが、やはり、辛かっただろうと思います。

徐々に携帯電話の扱いも難しくなり、こちらから送るメールや写真などは見ていたようですが、父からの発信は数えるほどでした。入院中であつた門徒葬儀についても、私に劳いのメールを送ってくれました。

四月二十六日頃から、誤嚥の回数が増え、誤嚥性の肺炎に罹り、点滴等の処置をしていただくこととなりました。誤嚥の恐れもあり、鼻からチューブを通して栄養を摂ることとなりましたが、担当の先生からは、「熱が下がれば大丈夫ですが、急変をするかも知れません」という電話をいただきました。その後も、先生からは、病状について電話で知らせていただくなど、丁寧に対応をしていただきました。

三月末から庄迫骨折で動きの取りづらかった母が、ようやく病院に行くことができるようになって、看護師さんを通じて病状を聞くことしかできませんでした。

父の亡くなる前日に姉が病院に行きましたが、慌てる必要も無い雰囲気だったようです。

五月三日午前八時半過ぎに、病院から電話があり、かけつけました。この日も朝食を採ることができるほどの状態であったようですが、その後、容態が急変し、呼吸も苦しくなり、最期を迎えたようです。

辛抱強い父は、痛みや苦しみを口（言葉）にすることはありませんでした。思い通りに動けず、言葉を発することも思いのままにならなくなっていくのは、さぞ、辛かっただろうと思います。

八十八年の娑婆の縁が尽き、娑婆の苦しみからでることができませんでした。

【ご和讃】 弘誓のちからをかぶらずは

いづれのときにか娑婆をいでん

仏恩ふかくおもひつつ

つねに弥陀を念ずべし（『註釈版聖典』593頁）

【現代語訳】 阿弥陀仏の本願のはたらきを受けなければ、はたしていつ娑婆世界を出ることができようであろう。仏のご恩を深く思い、常に阿弥陀仏の名号を称えるがよい。（現代語版『三帖和讃』115頁）

少し長くなりました。

お世話になった担当医や看護師たちに見送られて、父と共に直ぐに自坊に戻り、二十年ほど前に父が奔走して建立させていただいた本堂内陣に寝てもらいました。

生前、懇意にいただいた方々への御礼、多くのご心配をおかけした方々へのお詫びやご挨拶をすべき所ですが、私の独断で、新型コロナウイルスの感染拡大防止の時期を考慮して、近くにいる家族だけで通夜・葬儀を肅々と勤めさせていただきました。諸般の事情、ご賢察いただければ幸いです。

また、五月十日現在、緊急事態宣言も解除されず、わたし自身も大学勤務が不規則な状態にあり、留守がちで寺に常に居ることもできません。満中陰法要も、内々で勤めさせていただこうと考えています。

失礼・非礼を重ねてしまいますこと、衷心よりお詫びしつつ、今後、さらなるご教導を賜りますようお願いを申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

以上が、親類に送った父の訃報の抜粋です。個人情報満載の私信です。

面会に行くことができず、寂しい入院期間であったと思います。

入院前に自宅で食事をしている折にも、誤嚥で咽せることがあります。若い頃に咽せることがあっても、たいしたことはありませんが、老齢の身で咽せると、相当に苦しかっただろうと思います。病院で痛みや苦しみを和らげる処置はしていただけたとしても、痛みや苦しみが皆無ということもないだろうと思います。

寂しく辛い最期を迎えたであろう父は、経済学を専門にしつつ、五十年間、住職を務めた父です。『仏説無量寿経』の「独り生れ独り死し、独り去り独り来る」(『註釈版』五十六頁)という人間の生死の厳しさを思い知らされつつ、いつどんな最期を迎えようとも、阿弥陀という仏さまは必ず私と共にいてくださる仏さまであるとわ



かっていたらと思う。寂しく辛い最期でありつつ、同時に、尊い最期を迎えたであろうと思います。親鸞聖人の仏教・浄土真宗の醍醐味はここにあると思います。臨終は勿論、平素から私と共にいて、私と苦楽を共にしてくれる仏さまがいるということは、他の何にも代えがたい安心感を与えてくれます。

父の往生後、家中（寺のあちこち）に、事務・寺務を記した私へのメモ書きなどを見つけ、息子である私が困らないようにという配慮に出会うことがあります。老齢となり、自身の人生の最期を意識する毎日、一つ一つの動作が鈍くなり、思考もゆっくりとなる中、私のために時間をかけて整理をしてくれたことに、最近になってようやく気付き始めています。

自分の人生は自分で切り拓き、自分で歩み続けなければなりません。思い通りにうまくいく時もあります。思い通りにうまくいかない時もあります。時には邁進し、時には立ち止まりながら、人生を歩みたいものです。いつ如何なる時も私を思い、私と共にいてくださる存在を知ることができれば、また新たな一歩を踏み出すことができるでしょう。

プラベートなことに終始してしまいましたが、最近の所感を記させていただきました。

伝道部法話（朝の勤行五分間法話 二〇二三年四月二七日）

# 「どんなときも」

西居 顕真

（真宗学四回生）

【マ】讀題】

煩惱にまなこさへられて 摂取の光明みざれども 大悲ものうきこと  
なくて つねにわが身をてらすなり

〔高僧和讃〕源信讃／『註釈版聖典』五九五頁



みなさんの中には新入生として初めて一人暮らしをし始めた方もいるでしょう。

私は実家が熊本で、一人暮らしを始めた最初の頃は寂しくて仕方なく、特に用事もないのに母に電話をかけたりにしていました。しかし、次第に大学生活に慣れてくると、親への連絡を怠るようになり、親からの連絡に返事をしないことも増えました。

ある日、引越しをすることになり、父が熊本から車で何時間もかけて手伝いに来てくれました。

引越しが終わり、車で音楽を流しながら高速道路を走っていると、さだまさしさんの「案山子（かかし）」という曲が流れて来ました。このような歌詞の歌です。

元気でいるか 街には慣れたか 友達できたか さびしくないか  
お金はあるか 今度いつ帰る  
手紙が無理なら電話でもいい 金頼むの一言でもいい お前の笑顔  
を待ち侘びる おふくろに聞かせてやってくれ

この歌を聞いて、私は、親が電話をかけた時にいつも相手をして  
くれたこと、お腹が空かないようにと手作りの料理を冷凍で送って  
くれたことなどを思い出しました。

「有難いことだったな。」

と思い、同時に恩を忘れていた自分を恥ずかしく思いました。

浄土真宗では阿弥陀さまを親さまと呼ばせていただくことがあり  
ます。

親がいつも子を心配していても、子は気づこうとせず、忘れて毎  
日を過ごしている。親が心配して連絡をしても、子は「忙しい」と  
ないがしろにしてしまう。親心と子心とはそういうものなのではな  
いでしょうか。

阿弥陀さまはどんな時も私を想ってくださいる親心の仏さまです。  
しかし、阿弥陀さまが私を想ってくださいさっている時も、私は気付い  
なかったり、時には背いてしまったりすることがあります。

阿弥陀さまの「どんなときも」この私を見捨てないという心は、  
わたしが手を合わせて南無阿弥陀仏と称えてるときも称えていない  
時も、ありがたく思う時もある時もない時も、どんな私であっても、「お  
前を決して独りにはさせない、この阿弥陀が、南無阿弥陀仏という  
声の仏となって、お前のそばにいるから安心してくれよ」とよび続  
けてくださっている心です。

私は、どんなときも独りぼっちにはさせない、という願いの中に生きています。嬉しい時も悲しい時も、どんなときも独りではないということ、南無阿弥陀仏に聞かせていただきたいと思えます。

### 〔伝道部五分間法話〕

深草学舎顕真館では、毎週木曜日の朝の勤行の後、伝道部が五分間法話をしていています。

学生ならではのフレッシュな法話を是非聞きにきてください。

YOUTUBEにて配信もしています。



# 深草キャンパスの自然 春々夏

## 部 矢 祥 子

(本学非常勤講師)

三月初め。紫英館前に咲く八重の白梅が、真つ先に春の訪れを知らせてくれます。この梅は、花をたくさんつけますが、実は二、三個。造園師(定期的に來校する花豊さん)に尋ねると、「実がつかないなら、花梅じゃないかなあ」と。花梅(鑑賞用)と実梅(収穫用)の違いを知りました。

四月。休眠していた芝生が、緑色を増し始めます。冬芽の赤い枝先が細いマツチ棒のようだった満天星、『万葉集』にも詠まれている馬酔木が、小さな白い鈴形の花をつけます。

キャンパスの桜の木を数えてみると、何と六八本確認できました。七割は染井吉野ですが、顕真館前と池のそばに枝垂桜、紫英館前に莊川桜、通用門側の生垣に牡丹桜があります。西門側の生垣にある、染井吉野よりも早く開花し、白い花と同時に緑色の葉を出し、のちに実をつける一本は、大島桜でしょうか。あの、桜餅を包んでいるのが大島桜の葉です。

これらが開花日を違えて咲き、池に散り込んだ花卉は花筏になって回り、ひと月は桜を楽しむことができます。

紅葉葉楓の若葉が、棘のある茶色の実をつけたまま萌え出し、雌雄の花をつけます。風の日は、雄花と実を落とします。

樟は常緑樹ですが、古い葉をさかんに落とし、新しい葉に入れ替わる初夏まで、清掃員は落ち葉掻きに大忙しです。爽やかに香る木

の下に立つ時、樟で丸木舟や仏像、樟脳（防虫剤）やセルロイドの人形が作られた歴史を思い起こします。

紅色ハナミズキに咲く花木水木は、花（総苞片）の大きさと色（濃淡）、花数が年毎に変化するように思います。本誌第一〇六号「ハナミズキ」歴史と伝説の花々」をご覧ください。

生垣の紅要ベニカメセサ繭は、新葉が赤く、これは「アントシアニン色素によるもので、紫外線や食害生物から身を守っている」などと言われます。細かな白い花をつけ、葉は次第に緑色に変わります。

藤棚に藤（白・紫色）が咲くと熊蜂、躑躅ツツジ（九州の地名を冠した、久留米・霧島・平戸躑躅）が咲くと揚羽蝶が訪れます。

葶スレ、蒲公英タンポポ、片喰カタバミ、母子草ハハコグサ、春紫苑ハルジオン、白詰草シロツメサ、庭石草ニワゼキショウ、烏野豌豆カスノエンドウ、雀の槍ヤリなど野の花が咲き、土筆ツツシ（山菜の一つ）、蓬ヨモギ（草餅や薬湯に利用できる）、葸トクモ（葉草。別名は十薬）も生えます。昨年からはまったプランターでの米作りにより、仏の座ホト、雀の鉄砲、薺ナズナなど田畑の植物も見られます。これらの花を求めて、紋白・紋黄蝶、セセリ蝶、シジミ蝶などが飛び交います。

五月。その名通りの五月躑躅サツキツツジが咲き誇ります。黒丸花蜂クロマルハナバチでしょうか。後ろ足に重たいほどの花粉団子を付けて、花の上を飛び回っています。

また、弟切草科の金糸梅キンシバイが、華やかな黄色の花をたくさんつけ、暑さと日照りに耐えて長い間咲き続けます。

山法師ヤマボウシと、泰山木タイサンボク（正門前の街路樹）が、白い花を咲かせます。なお、山法師の白い四枚の花弁に見えているのは、総苞片です。

山法師の名は、日本の中世前後の山法師（僧兵や武蔵坊弁慶）たちが被っていた白い裏頭かぶとう（頭巾）に由来します。白い総苞片が、山

法師の白い裏頭に似ていることから名付けられました。一方、泰山木の花は、大きくて香りが良く、白い花卉はレンゲ（陶製の匙）に似ています。

キャンパスに、雀、鳥、そして磯鴨も営業しているようです。雀と鳥の雛が、翼をバタつかせ親鳥から口移しで餌をもらう姿を見かけます。磯や岩場にいるはずの磯鴨が、近年は高層の建物が立つ市街地に生息地を広げ、キャンパスにも飛来してよく囀ります。雛に与えるのでしよう、虫を啜え、警戒した様子で桜の秀枝に止まっています。

トカゲも現れます。茶褐色の成体、メタリックブルーの幼体も見かけます。

池に水黽が飛んで来て、水紋を描いて泳ぎます。どこで生まれ、どこへ去って行くのでしょうか。アメンボロ飴棒。本当に飴のように匂うのでしょうか。

蒲公英が綿毛を飛ばし、夏が近づいていることを知らせます。プランターの花も、春のピオラやマーガレットなどから、夏の百日草や日々草などに植え替えられます。

六月。プランターに、稲の苗が植えられました。米作りの一年を、身近に観察させてもらえます。

梅雨時に、山桃の実が暗赤色に熟します。三か所に植えられた雄・雌木のうち、実がなるのは雌木。生食できる実をたくさんつけます。雀や椋鳥も来て啄んでいます。

紫英館前の築山に、薄紅色で可憐な姿の振花が群生して咲きます。これがラン科とは驚きです。旧図書館が撤去され、日当たりが良くなつたせいでしょうか、生育場所を少し広げているように思います。

ただ残念なのは、草地に生えるため、この植物に気付かず草刈りがされてしまうことです。葉が痛々しく傷ついているのを見かけます。

梔子クチナシと小梔子コクチナシが咲き、甘く香ります。幼虫がこの葉を食はんで蛹エサ等になり、羽化したのでしよう。大透翅オオスカシバが、傍に咲くペンタスの蜜を吸っています。大透翅が好むアベリアの花も咲いています。

七月。顕真館の傍に、真つ白な木槿ムクゲが咲きます。花は次々に咲きますが、「槿花一朝の夢きんかいちちようのゆめ」の言葉通り、朝咲いて夕方にはしぼみ、花卉を閉じて落花します。この花は、人の世の儂はかなさと、無常であるがゆえの命の美しさを伝えているかのようです。

今年、蘇鉄ソテツが五個以上も雄花をつけました。雄花は巨大で、形と色は、皮をむいたトウモロコシに似ています。

八月。樹々で熊蟬クマゼミが賑やかに鳴いています。キャンパスは焼けつくような暑さで、人も動・植物も雨を待っています。





私もナスも紫ではない

嶋田君晴

(農学研究科食農科学専攻)



二〇二二年度仏教活動奨励金 (愛称：宗教部プライズ・宗プラ)  
フォトエッセイ部門 入選 三万円 テーマ「平和 私もナスも紫ではない」

毎年やってくるお盆が過ぎ、残暑という言葉に疑問を覚える八月末のこと。私は研究の傍、農学部で農場で収穫作業のアルバイトをしていた。

暑い中での作業は、面白いことの一つでも見つけねば気持ちまで溶けてしまう。

私は、数日でみるみる大きくなる夏野菜の中に、「彼」を見つけた。彼はこの日の私の農作業を豊かにしてくれた。きっと学生生活が終わってから記憶に残り続けてくれることだろう。

異形の野菜は農業では珍しいものではない。SNSなど、情報源が発達した現代では、誰しもが各シーズンに一回は目になっているのではないだろうか。セクシー大根・二人三脚ニンジン・片手合掌の自然薯・四角いスイカ・ハート型トマト……。それらの異形の野菜たちからは植物のたくましい生命力や生産者の想いが感じられる。私が見つけたナスのように、異形の野菜たちは、今までもこれからも誰かの心を賑わせてくれるに違いない。

農場の実習棟で野菜の選別が終わった休憩中、せっかくなので「彼」には農場を眺めてもらうことにした。「彼」を二階の階段廊下の柱に立て掛けた。二十二歳の学生が必死になって位置調整を行う。私は彼と勝手に意気投合している気になり、昼下がりの日差しも忘れて撮影に熱中した。そして、だんだんと、私は農学の視点と共に、私自身が抱えている想いから思索にふけていった。

このようなナスはスーパーに並ぶことはない。市場に流通する野菜というのは形や重さの規格が厳密に決まっていて、均一なもののみ価値が見いだされている。しかしながら、食べてみれば味は同じであることは想像に難くない。艶光りした濃い紫の実を割れば、その外見から不意を突かれるほど白くやわらかな断面が現れる。また、欧州や原産地のインドでは内側も外側ともに白色のナスの存在は周知のことである。

誰しもが大人になる過程のどこかで、「物事を見た目で判断してはいけない」と一度は誰かに諭された経験があるのではないだろうか。それなのに、どうしてこのようになってしまったのだろうか。それが市場の原理であるから、という一言だけでは片付けたくない問題である。彼が私たちに危害を加えることはないのに、世間からは必要とされないどころか排除される対象となってしまう。

ヒトはどうだろうか。ただ、そのヒトが「○○である」というだけで、世間や他者から腫物扱いされたり、いじめられたり、病気なのではないかと言われたり……。○○であつたからといって誰かに迷惑をかけるわけでも、法を犯しているでもなく、他のヒトと同じように、社会で働き、楽しく豊かな時間を過ごすそうと懸命になり、人によってはパートナーと共に生きている。ほんの少しの違いで、そのヒトの価値や優劣が決められるようなことがない世界があるとすれば、それはきつと誰もが過ごしやすい世界であると言えるのではないだろうか。

撮影の手を止めて考えてみる。かく言う私も、知らず知らずのうちに物事を少しの違いで分け隔てていてはないか。私も、社会と世の中を構成する一部であり、例外ではなく、一人のヒトなのである。

もし、淡々と収穫作業をしていたとすれば、このナスには目もくれず、学内配布用の袋にナスを詰めて終わっていたのではないだろうか。そして、もし同じように淡々と人生を過ごしてしまったとしたら……。背中に汗がにじんだ。だからこそ、過酷な暑さが続く人生においても、あえて立ち止まり、一つひとつを吟味しながら生きてゆこうと思った。明日は少しだけ涼しくなるかもしれない。

京ことばの心髄にせまる

# 《イマジ》と《気遣い》のはなはち



泉 文明

(国際学部教授)

第7回

ぶぶ漬伝説 ② — 京ことば

東京・大阪に限らず、誰かが家に訪ねてきてくれるのはある程度親しい人であることが多いから、客が「もうこんな時間、失礼します」と言っても、まず引き留めることはよくあるはずである。

「え、もう帰るの？ まあそう言わずにビールもう一杯飲んでいけば？」とか、「あら、今ちょうどコーヒーを入れようとしたところなんですよ」といった具合に相手に声をかけるのは別に珍しくもないし、ましてや早く帰ってほしいから、わざと言うはずがない。京都でも同じで、今どき「ぶぶ漬けでも」というセリフが聞けるかどうかは疑問である。少なくとも「何か召し上がれば？」といって引き留められるのはあくまでも好意的な場合が多いのは間違いない。

京都の人・京都出身の人、約三〇〇〇人に「ぶぶ漬伝説」を実際

に体験したことがあるか、尋ねたことがある。結果は、二・五人であった。二名の方は、いずれも七〇〜八〇歳代の西陣出身の女性で現在は関東地方にお住まいの方である。〇・五名というのは、七〇歳代の男性で、幼少時に四条河原町辺りにお住まいだった頃、「学校から帰って友達の家遊びに行くわ」と言う、祖母様から「お茶漬け出されんうちに、早よ帰ってきーや」と送り出されたのとこのことである。

これについて、京都新聞社から取材を受けたことがある。二〇一七・三・？朝刊に記載されている。わたくしの見解は、「理屈で考えて、基本的にはあり得ない」ということである。なぜなら、客がこの意味を知っていれば「正直に「今日は忙しいので、またゆっくり来て下さい」と言えはいいのに、性格悪いじゃん」と思われることになる。また、客がこの意味を知らなければ「いいんすかっ。じゃお言葉に甘えて」となり、慌てて支度しなければならぬ羽目になる。

つまり、どちらにしてもメリットはないということである。そんな思いをしてわざわざ言うかな？言わないだろう、というわけである。

なお、京都新聞の調査によれば、「ぶぶ漬」を体験した人が数名居るようである。

以上から現在は「ぶぶ漬伝説」は単なる伝説であって、実際は存在しないものと言っても過言ではあるまい。ただ、このストーリーは京都人らしさを言い得て妙である。京都人は言い辛いことをいうのが、際立って苦手な人が多いとは言えるかもしれない。この種の

伝説を調べてみると、「ぶぶ漬」に限らず、「コーヒーを勧める」とか「お茶を淹れかえる」とか「座布団を勧める」とか種々あるようである。

(次回【第八回】に続く)



哲学の道 桜



## 菩提樹から遠く離れて

野澤信孝

(REC 京都)

宗教部から「テーマは何でも」と原稿の依頼をいただいた。せっかくだから少しでも宗教に関連したテーマの方がいいのかな、とぼんやり考えていると、二〇年以上前、大学一年生の時に思い付きでインド旅行に行き、一週間ほどブツダガヤに滞在したことを思い出した。

### ブツダガヤでの日々

ブツダガヤ中心部を歩いていると、修学旅行に来たのか、坊主頭でえんじ色の僧衣を着たグループがコカ・コーラの瓶をラップ飲みし、タバコをふかしながら歩いていた。

ブツダガヤは仏陀が菩提樹の下で悟りを開いたところで、マハーボーディ寺院という有名なお寺があり、そこには今でもその菩提樹の子孫と伝わる木がある。

そばに日本山妙法寺という日系のお寺があり、図書室を自由に利用させてもらえた。手塚治虫の「ブツダ」が全巻揃っていたので、一週間の滞在中、借りてきては毎晩少しずつ読み進めた。

日中、村の周囲を自転車であらうろろしていると、中心部から田んぼのあぜ道を抜け少し離れた場所に、行き倒れたブツダがスジャー



タさんから乳粥をもらったスジャータ村があった。さらにもう少し走ると苦行林があった。マンガに出てきた場所を「ああ、ここか」と指さし確認できる。

また、付近には各国のお寺が連なっていた。東南アジアを母体とするお寺は、コンクリートでできた本堂がタイルで装飾され、真新しいペンキで白く塗られたご本尊の背後には電飾がちりばめられていて極めて明るいものだった。お寺と言えば、樹木に囲まれた茶褐色の木造建築と酸化した仏像の地金のイメージしかなかった私は、そのあまりの違いに、山や海を越えて日本へ仏教が伝来するまでの過程を考え茫然としたのを覚えている。

日本と同じ温帯のはずだが乾季だったからか、長距離バスで仏陀の生まれ故郷であるルンビニに向かう途中の道路や路肩は土煙の多い荒涼とした風景だった。

### 龍谷大学での日々

それから時間が経ち、現在縁あって龍谷大学で職員として働いている。不勉強なので仏教への理解は未だ乏しく、日々何か間違っているのではないかと思いつながら生活している。

龍谷大学構成員として様々な行事に念珠を持参するが、入職してしばらくは百円ショップの念珠でやり過ごしていた。ある日、龍大職員たるものプラスチックの念珠はいかなものかと思い、本願寺前の仏具店で「縁あって龍大職員になったので、適切な念珠をください」と伝えたところ、「おお、それはそれは。うーん…」と五千





円強の紐房の念珠を出してくれたので、それを買って帰った（今も使っている）。そもそも、念珠の素材や形状に違いがあることをそれまで知らなかった。

他にも、日々の生活の中で、宗教に関連した（ように思える）ディテールが気になってしまう。各キャンパスの門で礼拝施設に向かって一礼するのはなぜか、寺族の同僚が夏休みに合わせた得度で頭を丸めているのはなぜか（日常では頭髮に関するルールが無いのに）、といったように、生来の性分なのか、本質的な理解が乏しいまま細部ばかり気になり時間だけが徒に経過している。

## お齋への疑問

報恩講の際にいただく「お齋」についても疑問が解決しないまま今に至っている。

本願寺第十三世良如上人の御祥月命日である龍谷大学の報恩講では、職員は大学の行事としてフォーマルな格好をして法要に参加し、法話と講演を聞き、頂いたお弁当形式の「お齋」を自部署に戻りいただく。

入職して初めて法要に参加した際、お齋が精進料理なのを見て「あれ？」と思ったのを覚えている。実家は日蓮宗なので、これまでの人生における浄土真宗との接点はKOEIのゲーム「信長の野望」（頭上人が「本願寺光佐」として登場）くらいだったが、浄土真宗においては肉食妻帯が認められていることだけは何となく知っていた。それなのに、なぜ精進料理を食べるのか。ホームページを見ると東西の本願寺でも報恩講では精進料理が提供されるようだ。

ありがたいことに、職員も利用ができる深草図書館に行ってみると、『肉食妻帯考 日本仏教の発生』（中村生雄著、青土社、二〇一）

という本があった。肉食や報恩講と肉食との関連について以下のよう  
に書いてあった。

— 本来の「齋」とは僧侶の食事（午前食）のことである。

— 仏教の原始教団においては、僧侶は信者によつて供養されたものは肉を含めすべて食べるのが原則で、倫理的な行動の基準である「五戒」にも「不殺生」という項目はあるものの、肉食を禁じる項目はなかった。

— 日本で仏教が国家の保護を受けるようになって、農耕に有益な家畜の保全や土着の信仰、タブーと関連して肉食禁止令が発せられた。

— 江戸時代までは東西の本願寺では報恩講の最後に「俎直し」という行事があり、鯉などの魚料理を参詣の門徒の方に振舞っていた。

— 東京の報恩寺（真宗大谷派、「坂東本」が伝わる）では、毎年一月十二日に土地の天神の氏子の代表が鯉を供え、料理人が鉄箸と包丁だけで切り裁いて供える儀式「俎開き」が今も続いている。

常識なのかもしれないが、仏教の基本的な戒律ではそもそも肉食自体が禁止されていないことに驚いた。お斎のそもそもの意味も知らなかった。そして、本願寺の報恩講におけるお斎で、鯉が提供されていたことにも驚いた。

江戸以降のどこかのタイミングでお斎として精進料理が提供されるようになったのだと思う。他の本も読んでみたが「俎直し」が行われなくなった理由には出会えなかった。また、お斎として精進料理を提供することについて積極的にとどのような意味を付しているのかについてもわからなかった（様々な地域で提供されていることを示す調査はたくさんあった）。

前述の『肉食妻帯考』には、興味深い箇所があった。

— むしろ近世になってまいりますと真宗教団の方がそのような世俗的な道徳律というのでしょうか、もちろんその背景には仏教的な戒律があるわけですが、そのようなものの擁護者の側面を強くしていくことがあります。(五四頁)

— 元禄時代からの真宗教団は自分たちの宗派としてのオリジナリティを打ち出すため、他宗派とは異質な「肉食妻帯」であることを積極的に宣伝していく戦略を取りました。これはちょうど將軍綱吉の「生類憐みの令」の時代にあたります。(七五頁)

— 少なくとも、蓮如以前では、真宗の側があえて自分たちの特徴を肉食妻帯という言葉で誇示することはありませんでした。(一一三頁)

事象をどのように解釈し、価値を見出し、それを自分や社会に当てはめていくかは、社会的な文脈や制約による部分も多いということなのだろう。だから現在提供されている精進料理にも何らかの意味があり、江戸時代に鯉が提供されていたことにも意味があり、どちらが「正しく」どちらかが「間違い」ということでは当然なのだろう。

それを考えると、インドの田舎の村で、ぼんやり菩提樹の前を歩いていた私の学生時代から、時間と場所の隔たりを越えて、極東の島国の古都にある大学の片隅で働いている自分も、予定調和な存在なのではなく、時代や人との関わりのおかげで揺らぎながら生きていくのだと思う。

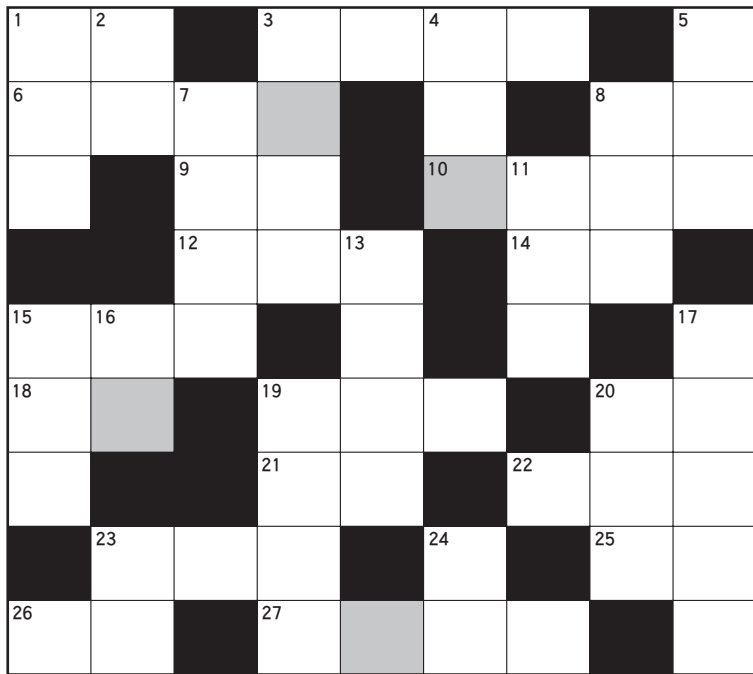
# 第86回



今回は熟語のクロスワードです。

熟語の○に当たるよみがなで表を完成させてください。最後に灰色のマスに入る言葉を並べ替えてできる高僧の名前が答えです。

【出題：小川信正】



答え：

第85回の正解

唯	発	能	帰	命	無	量	人	極
説	一	清	浄	歎	切	一	悪	重
弥	念	号	名	喜	一	生	造	法
陀	超	本	願	大	広	言	仏	蔵
月	日	倦	無	悲	印	天	親	菩
光	闍	横	天	国	度	西	自	薩
善	単	超	人	土	時	即	然	本
明	独	唯	明	浄	鸞	開	広	師
顕	釈	迦	如	来	曇	入	信	源
大	聖	興	以	所	師	本	願	空

答え：親鸞聖人

★解けた人は答えを今年度中に宗教部（顕真館北側）へお持ちください。  
正解者には記念品をさしあげます。

タテのヒント

1. ○○兄弟
2. ○難八苦
3. ○○安眠
4. ○○老人
5. ○○伝心
7. ○○狗肉
8. ○○地獄
11. ○○一会
13. ○○無念
15. ○○端麗
16. ○我独尊
17. ○○三昧
19. 極楽○○
20. ○○応変
23. ○○翹翹
24. ○○鳥

ヨコのヒント

1. ○○身中
3. ○○礼色
6. ○○風月
8. ○○無欲
9. ○○高才
10. ○○供養
12. 抑揚○○
14. ○着冷静
15. ○○緯緯
18. ○○転変
19. ○○法爾
20. 愛別○○
21. ○大文明
22. ○○体
23. ○令暮改
25. ○心担懐
26. ○○深長
27. 唯我○○

# 法要・行事の 振り返り

法要・行事・宗教部の  
取り組みの多くは  
YOUTUBEで  
ご覧になれます。



《二〇二二年》

九月二十一日(水) ご生誕法要 (瀬田樹心館)

「アジアの多様性を楽しむ」

藤田 悟 (社会学部教授)

十月四日(火) 現代的課題と建学の精神 (オンライン)

「部下・上司 職場のステキなカンケイづくり」

水口 政人 (文学部教授)

十月十八日(火) 報恩講 (深草頭真館)

「鑑真和尚の教えに学ぶ」

松浦 俊昭 (律宗壬生寺貫主)

十月二十一日(金) ご生誕法要 (瀬田樹心館)

「和装本や寺社からの生物試料採集…生態学  
者の歴史学」丸山 敦 (先端理工学部教授)

十月二十四日(月) 現代的課題と建学の精神(オンライン)

「誰もが自分らしいキャリアを描ける大学の  
ために」LGBTQからダイバーシティ、エ  
クイティ&インクルージョンを考える」

中島 潤 (ReBit事務局長)

十月二十六日(水) 学長法話(深草顕真館) 入澤 崇学長

十一月十五日(火) 学長法話(大宮本館) 入澤 崇学長

十一月十五日(火) お速夜法要(深草顕真館)

「情報技術は拡声器か、分断の契機か」

八幡 耕一 (国際学部教授)

十一月十六日(水) ご命日法要(大宮本館)

「いのちの現場で教わったこと」

森田 敬史 (文学部教授)

十一月十八日(金) 全学人権講演会(深草顕真館)

「記者二八歳『私は部落から逃げてきた』

」出自を明かして当事者として取材」

中原 興平・西田 昌矢 (西日本新聞社)

十一月二十一日(月) ご生誕法要(瀬田樹心館)

「根本的原因と間接的原因」

本多 真 (農学部非常勤講師)

十一月二十二日(火) 公開講演会(深草顕真館)

「東大寺—大仏造頭のこころ—」

上司 永照 (東大寺執事長)

十二月八日(木) 成道会(深草顕真館)

「多様な性ってなんだろう?—互いの違いを受け

止めあえる社会を目指して」 ReBit

十二月十三日(火) 学長法話(瀬田樹心館) 入澤 崇学長

十二月十五日(木) お逮夜法要(深草頭真館)

「ブツダは人工妊娠中絶を責めるか」

大谷 由香(文学部准教授)

十二月十六日(金) ご命日法要(大宮本館)

『マトリックス』の世界―唯識無境について―

早島 慧(文学部准教授)

十二月二十一日(水) ご生誕法要(瀬田樹心館)

「頭の中身をまねたい機械の進展とパーセ

プトロンからディープラーニングへ」

三好 力(先端理工学部教授)

## 《二〇一三年》

一月十六日(月) ご命日法要(大宮本館)

「物語としての浄土教」

岩田 文昭(実践真宗学研究科非常勤講師)

二月三日(金) 現代的課題と建学の精神プログラム(オンライン)

「宗教三世 こころの穴を埋める旅と生き延びるた

めの依存症でした」

三森 みさ(イラストレーター／漫画家)

四月二十一日(金) ご生誕法要(瀬田樹心館)

「病院で活動する宗教者たち」

打本 弘祐(農学部准教授)



四月二十八日(金) 公開講演会(深草顕真館)

『世界に平和の鐘を響かせよう!』と和貴無  
忤、ニューヨーク坊主三〇年の取り組みと

中垣 顕實(ニューヨーク平和ファンデーション代表)

五月十五日(月) お逮夜法要(深草顕真館)

『少年の日の思い出』を巡って…小説家と文学  
研究者になるまでの旅

澤西 祐典(国際学部講師)

五月十六日(火) 『命日法要(大宮本館)

「葬儀にお坊さんは要らない!?」元葬儀スタッフ  
僧侶が語る裏話」三ヶ本 義唯

(元大手葬儀社勤務葬祭プランナー・本願寺派布教研究専従職員)

五月二十一日(日) 降誕会法要(深草顕真館)

「法然と親鸞…二人の功績を考える」

平岡 聡(京都文教大学教授・前学長)

五月二十一日(日) 降誕会法要(瀬田樹心館)

「浄土真宗の源流」佐々木 義英

(本願寺派司教・龍谷大学非常勤講師・中央仏教学院講師)

五月三十一日(水) 学長法話(深草顕真館) 入澤 崇学長

六月十五日(木) お逮夜法要(深草顕真館)

「食べることで生き物を守る〜京都府京丹後市で  
のゲンゴロウ郷の米のチャレンジ〜」

谷垣 岳人(政策学部准教授)

六月十六日(金) 〓命日法要(大宮本館)

「地上最大のロボットと阿弥陀仏〜知り尽くすとと慈しむこと〜」井上 善幸(文学部教授)

六月二日(火) 学長法話(瀬田樹心館) 入澤 崇 学長

六月二十一日(水) 〓生誕法要(瀬田樹心館)

「親鸞聖人の生き方から問う環境問題 環境問題から問われる念仏者(私)の生き方」

田阪 法雄(本願寺派僧侶・布教使)

六月二十一日(水) 公開講演会(深草顕真館)

「居ないのではなく、言えない社会〜いま私たちにできること〜」

かずえちゃん(ユーチューバー)

七月十一日(火) 学長法話(大宮本館) 入澤 崇 学長

七月二十一日(金) 〓生誕法要(瀬田樹心館)

「プログラミングと自己参照」

中野 浩(先端理工学部教授)

九月二十一日(木) 〓生誕法要(瀬田樹心館)

「地域社会における寺院の役割」

高瀬 顕功(大正大学社会共生学部専任講師)

十月二日(月) 現代的課題と建学の精神(オンライン)

「何のためのジェンダー平等?」

渡辺 めぐみ(社会学部教授)

十月十日(火) 学長法話(深草顕真館) 入澤 崇 学長

十月十六日(月) 〓命日法要(大宮本館)

「み教えを依りどころに生きる」

能美 潤史（法学部准教授）

十月十八日（水） 報恩講（深草顕真館）

「自他一如—カンボジアの活動から商店街再生に至るまで—」 安武 義修

十月十八日（水） 報恩講（瀬田樹心館）

「コロナ禍の中で」 福岡 義朝（中央仏教学院長）

【掲載漏れのお詫び】

一〇七号において、本来であれば掲載すべき、左記法要の記載漏れがありました。誠に申し訳ございませんでした。お詫びして訂正いたします。今後は、このようなことが起こらないよう、チェック体制を強化し再発防止に努めてまいります。

二〇二一年十二月十五日 お逮夜法要（深草顕真館）

「カムカムエヴリバディ—あなたが主役—音楽法座へようこそ」

羽溪 了（短期大学教授・田中知子 短期大学部准教授）

伝道部による法話（木曜日朝の勤行後五分間法話・顕真週間朝法話）

十月六日（木） 法話者…宏林晃平さん 講題…恩送り

十月十二日（水） 法話者…玉木興慈先生

講題…どんな人も、どんな私も

十月十三日（木） 法話者…七里弥名さん 講題…日々感謝

十月十四日（金） 法話者…池田惟さん 講題…いい人、悪い人

十月十七日（月） 法話者…西居顕真さん 講題…ともしび

十月二〇日（木） 法話者…七里弥名さん 講題…身近に教えを

- 十月二十七日(木) 法話者…小泉光慧さん 講題…虫と私と  
十月三十一日(月) 法話者…七里弥名さん 講題…色メガネ  
十一月一日(火) 法話者…中川拓紀さん 講題…仏ガチャ  
十一月三日(木) 法話者…廣本真昭さん 講題…知恵と智慧  
十一月十日(木) 法話者…西居顕真さん 講題…いきづらさ  
十一月十一日(金) 法話者…池田惟さん  
講題…良い天気、悪い天気  
十一月十七日(木) 法話者…岩田眞隆さん 講題…感謝  
十一月二十四日(木) 法話者…池田惟さん 講題…あたりまえ  
十二月一日(木) 法話者…平一眞さん 講題…救いのめあて  
十二月五日(月) 法話者…中川拓紀さん 講題…願い  
十二月六日(火) 法話者…平一眞さん 講題…命の天秤  
十二月七日(水) 法話者…廣本真昭さん  
講題…愛情への気づき  
十二月八日(木) 法話者…坂口慶信さん  
講題…撮め取られている私  
十二月九日(金) 法話者…岩田眞隆さん 講題…仏と私  
十二月十五日(木) 法話者…藤慧真さん 講題…平等の救い  
十二月二十二日(木) 法話者…坂口慶信さん  
講題…このままのすがた  
一月十二日(木) 法話者…中川拓紀さん 講題…一子のごとし  
四月十三日(木) 法話者…中川拓紀さん 講題…かえるところ  
四月二〇日(木) 法話者…岩田眞隆さん 講題…醜い私  
四月二十七日(木) 法話者…西居顕真さん  
講題…どんなどきも

五月十五日（月） 法話者…中川拓紀さん

講題…だれでも、どんな私でも

五月十六日（火） 法話者…岩田眞隆さん

講題…「一十一」（いちたすいち）

五月十七日（水） 法話者…玉木興慈先生 講題…光輝

五月十八日（木） 法話者…七里弥名さん 講題…親孝行

五月十九日（金） 法話者…長岡智月さん

講題…自分をみつめて

五月二十五日（木） 法話者…坂口慶信さん 講題…私の輝き

六月一日（木） 法話者…池田惟さん 講題…平等なおはたらき

六月八日（木） 法話者…長岡智月さん 講題…ふしぎ

六月十五日（木） 法話者…中川拓紀さん 講題…思いどおり

六月二十二日（木） 法話者…小泉光慧さん 講題…雨

六月二十九日（木） 法話者…平一眞さん 講題…朝焼け

七月六日（木） 法話者…藤慧真さん 講題…こんな私でも

七月十三日（木） 法話者…廣本真昭さん 講題…たまたま

## 【表紙写真解説】

滋野 正道（心理学部講師）

# ＃ツナガルアクリルプロジェクト

表紙写真のアクリルスタンド（アクスタ）は「＃ツナガルアクリル」プロジェクトの一環として作成したものです。

## ＃ツナガルアクリルプロジェクトとは？

このプロジェクトは、コロナ禍において私たちをウイルスから守ってくれた飛沫防止用アクリルパネルを新たな形で再生し、活用する取り組みです。

コロナ禍で、私たちの暮らしの中に一気に身近な存在となった「マスク」に加えて、「アクリルパネル」も同様に見慣れたものとなりました。一時は、私たちの健康を守る「壁」として機能していたのですが、少しずつコロナ禍前の日常が戻っていく中で、「いつまでアクリルパネルを置いているのか」「アクリルパネルのせいで相手と話せないから邪魔だ」とお感じになられていた方も多くいるのではないのでしょうか。（かくいう私も、外食などの際に「邪魔だなあ」と思いながら食事をとっている時もありました）

五月のゴールデンウィークを経て、国の感染症法上での「五類」移行を受けて、社会は大きくコロナ克服へと進み始めたことは周知の通りです。その裏側で、「アクリルパネル」はいつの間にか撤去されていることに皆さんはお気づきになられたでしょうか。

本学でも、教室や食堂等に設置されていたアクリルパネルが撤去され、リサイクルコンテナに山積みとなりました。管理課によると、本学では約六千枚ものアクリルパネルを導入し、そのうちの

多くはリサイクルへと回されるとのことでした。これは「もったいない」という感覚が芽生え、少しでも利活用できないだろうかと思案したことが、このプロジェクトを始めるきっかけでした。

アクリルパネルの九割が焼却処分されている！

アクリルパネルの行方について、社会に目を向けると様々なニュースが出ています。その中でも、「アクリルパネルの約九割がリサイクルされずに産業廃棄物として焼却廃棄される」という記事を見つけ、本学に限らず社会的に見ても、重要なトピックであることを知りました。日本国内において流通したアクリルパネルは、少なくとも三百万枚以上。環境省は、感染対策上不要となったアクリルパネルについて、可能なものは再資源化するように求めています。そもそもアクリルパネルを回収するプロセスや仕組みが整備されておらず、実際には一割以下しかリサイクル出来ていない状況が生まれています。



ホワイトボードとして使えるのでは？

私の研究室には備品としてホワイトボードが一枚常設されているのですが、どうしても一枚では手狭だと感じていました。そこで学内から撤去されたアクリルパネルを管理課にお願いして、研究室でいくつか引き取らせて頂きました。早速、ホワイトボードのような使い方を試してみたところ、ホワイトボードとしての機能はもちろんのこと、「透明」だからこそ使えるシチュエーションが多くある

ことに気がつきました。透明であることを活かして、下敷きに「ワークシート」や「イラスト」を敷いて、上から書き込むことができる。また、学内で使われていたサイズのアクリルパネルだと、四人程度のグループワークで使えるデイスカッションツールとしても機能します。コロナ禍以前からグループワークでのツールとして「cross / cloth board learning (クリアファイルを用いてグループワークを進める手法)」に取り組んでいたこともあって、アクリルパネルでも応用できると確信しました。



隔っていた壁を新たな「繋がり」を生み出すツールへ

趣旨に賛同・共感してくれた学生たちとプロジェクトチームをつくり日々活動しています。メンバーも個性豊かで、心理学部を中心に、経済学部、先端理工学部、文学部の学生が集まっています。深草、瀬田、大宮とキャンパスを超えて活動をしています。

プロジェクト第1弾では、教学企画部の協力を得て、深草ラーニングコモンズを中心に、コミュニケーションボード(学生が自由気ままにアクリルにお絵描きできる掲示板)の設置を進めています。将来的には、学生同士が学びの場で気軽に使えるデイスカッションツールとして貸し出せる仕組みを構想しています。

また、瀬田キャンパスのSTEAMコモンズと連携し、アクリルスタンドやストラップ型のデジタル名刺の製品化を目指し、プロトタイプの開発を進めています。

さらには、キャンパス周辺の飲食店とも連携をとって、店で不要



になったアクリルパネルのアップサイクルにも取り組んでいます。

これらの活動を通じて、社会の持続可能性のあり方を考え、アクリルパネルに限らず、使われなくなる未来も考えて限られた資源を活用することに目を向けてもらう機会を創出することを目指しています。

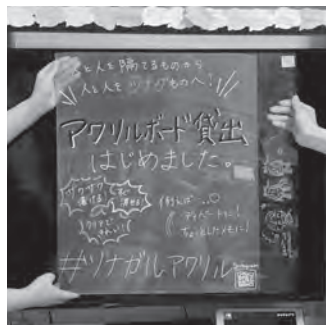
企業との連携も生まれている！

先日A M P（アクリルメガホンプロジェクト）を主宰している企業からコラボレーションのご相談が届きました。A M Pでは、パートナー企業と連携されており、コロナ禍で浸透したアクリルの「声を妨げる」イメージを逆手にとり、回収したアクリル板を「声を届ける」メガホンへと生まれ変わらせています。嬉しいことにお互いの考えに共感・共鳴し合い、今後連携を進めていくことが決まっています。

一緒にコラボレーションしましょう！

本活動を支えてくださっている本学管理課、学長室（広報）、教学生画部をはじめとして様々な事務部署の職員の皆様には感謝しております。引き続きのご支援賜りますようお願いいたします。単なる透明な「アクリルパネル」に新たな命が宿り、様々な可能性が広がっています。

ぜひゼミやグループワークでアクリルパネルを活用したい先生がおられましたら、ぜひともご一報ください！一緒にコラボレーションしましょう！



## 『浄土思想 釈尊から法然、現代へ』 岩田文昭著



中公新書  
'23年8月25日  
840円+税

浄土思想（浄土教）を発祥から現在まで丁寧調べ、分析し、読み解いていく。手ごかりとなるのは浄土思想の中にある「ものがたり」である。

浄土思想に少しでも興味を持って聞いたり調べたりしたことのある人には、法蔵菩薩が阿弥陀仏になる真実の物語（法蔵説話）が浄土思想の中核をなしているということは超・常識のように思われるが、まったく何の興味もゆかりもない人には遠い話なのかも知れない。そういえばわたしも、一つ一つのお経がすべて、釈尊が登場する、釈尊の語る物語の形式になっているという事実を初めて知ったときはかなり驚いた覚えがある。

『無量寿経』の「法蔵説話」や『観無量寿経』等の「王舎城の悲劇」という經典に説かれる物語に加え、浄土思想家の善導や法然、親鸞等にも伝記的な物語がある。これらの物語が浄土思想の深化や伝播に果たした役割も大きい。また浄土思想に親しんだり信仰したりする人もそれぞれ独自の、自分自身の「ものがたり」を持ち、生きている。これら個人のもものがたりと經典などの大きな物語との関わり合いやせめぎ合いが、今後の浄土思想に大きな影響を及ぼして行くであろう。

「物語」という視点は独特で刺激的である。そして、著者によつ

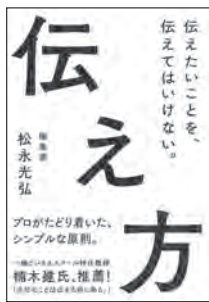
て丁寧に読み解かれる浄土思想史そのものが本当に大きな大きな物語になっていく。すごい。

個人的な話になるが、とてもなじみのある先生方の本や考え方が地の文の文脈で紹介されていて嬉しかった。

大変に平易でわかりやすい。言葉のはしから浄土思想家たちへの尊敬がにじみ出ている。今後、浄土思想をこれから学びたいという人には、まずこの本を薦めることになると思う。

【石】

『伝え方 伝えたいことを、伝えてはいけない』 松永光弘 著



クロスメディア  
'23年6月11日  
1580円+税

視聴覚伝道研究会（浄土真宗本願寺派の僧侶有志による会）の第十回記念大会のシンポジウムで松崎智海氏が紹介してくれた、「伝え方」の本。

書名とサブタイトルとの間に齟齬があるように思えるかもしれないが、そうでもない。言葉を補うなら「伝えたいことを、（伝えたい相手の都合や状況や興味などを考慮せず、そのまま）伝えてはいけない。（それでは伝わらない）」ということになる（と思う）。

というのは、何かを伝える場合、「伝えたいこと」が一方的に伝わるようなイメージがあるが実際はそうではないからである。伝える側の「伝えたい」という因だけで「伝わる」という果が得られるのではなく、伝えられる側からの「伝えられる」という積極的な関わりが、いわば「縁」としてはたらく必要があるのである。

また、もう知っていること（既知）と知らなすぎてピンとこない

ことへ未知〉には興味を持ってもらえない。興味を呼び覚ますのは「知りたい」と思っていることと、自覚されず潜在的に知りたがられていることへ〈伏知・造語〉である。だから、伝えられる相手の「伏知」や、それによって得られる利点に気付いてもらえるように、「伝えたいこと」が相手にとつて魅力を持つ「メッセージ」になるように試行錯誤していく。

わたしのこの文章ではうまく「伝わらない」と思うが、この本自体は読者が「あつ、これ大事！ 聞きたかった話！ その伝えてほしい！」と切実に思いながら最後まで読むことができる。帯には「プロがたどり着いた、シンプルな法則。」とあるが、シンプルなものではなく、やっぱりプロの仕業である。

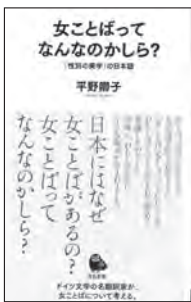
そういえば浄土真宗本願寺派ではいま「伝える伝道から伝わる伝道へ」というスローガンを掲げて従来からの「伝道」法を見直そうとしている。そこにもつながっていく話だと思う。

ところで、このブックガイドは読まれているだろうか。読まれなければそもそも伝わらないという事実についても切実に考えさせられる。

〔石〕

## 『女ことばってなんなのかしら？』

「性別の美学」の日本語 平野卿子 著



河出新書

'23年5月30日

860円+税

ドイツ文学の翻訳者による  
日本語・日本文化考察。

日本語では翻訳者が困るほど「男性」・「女性」で社会的に推奨される言葉が異なっ

おり、女性が用いるべき「女ことば」のあることが指摘される。

「女ことば」には罵倒語がないという指摘には驚いた。また女ことばを巧みに使うことで小説や映画では多くのことが言葉少なく正確に伝えられるという指摘にも震えた。(だから余計に翻訳の苦勞を思う。)しかし、差別的な現状を具体的に指摘しつつ憂える一節には恨み節に近いものを感じ少し食傷気味になってしまったし、また、言葉もだが言い回しにも性差のあることを指摘する場面では、語りが少し断定的すぎるように思えた。

いろいろな差別の中でも男女差別は根が深く、解消が容易ではないような気が個人的にはしている。かつ、自分自身でも気付かずにかなりやっているような恐れを持っている。そのような中、この本を読むと、ふだん何気なく使っている日本語の言葉が男女差別を助長し温存し定着させているという間違いない事実をつきつけられ、絶望に近いものを感じさせられた。

しかし絶望させて終わりではない。日本語や漢字の言葉が残念でも、実際の差別の解消が進めば問題は少なくなるという見通しも立てられる。また、差別が解消されても女ことばは「役割語」として残るだろうとも指摘される。そして、外国語や外国の文化に性の問題が皆無なわけでもない。性差別の解消のための努力は世界中で継続されるのである。

「差別」等の差別について考える、とある研修会で講師から紹介された。講義は大切な、しかしよく聞く内容だったが、この本はジェンダーや差別をめぐる新しい刺激に満ちている。素晴らしい本を紹介してくださった講師に感謝している。

【石】

## 『ChatGPTの頭の中』

ステイヴン・ウルフラム 著・稲葉通将 監訳・高橋聡 訳



ハヤカワ新書  
'23年7月25日  
920円+税

「チューリングテスト」(AIの回答と人間の回答との区別がつかどうかのテスト)が大変な話題になったのも懐かしい。AIの能力の一部は人類

のそれをとっくに超えて世界はこんなことになっている。

こちらからの質問に対してまとまった文章で答えてくれる「ChatGPT」というAIがどんな仕組みで動いているのかを解説する。

ChatGPTはAIなので人間のような体を持たない。だから「頭の中」という表現は当然譬喩ということになる。しかし質問にフツウに答えるという事実からつい「この人(?)の頭の中はどうなっているんだろう?」と考えてしまう場合もあると思うので、単なる譬喩を超え、かなりピタリな題名だと思う。

ChatGPTは、まとまった文章を作ってから回答するのではなく、言葉を発しながら次に発する言葉を探すという(「実は、一つずつ単語を足しているだけ」、人間とほぼ同じようなことをして回答しているのだそうだ。そのときネット上をくまなく検索のようなことを)して膨大なデータの蓄積の中からよりふさわしい言葉を探し出して次の言葉を発し文章をつむいでいく、らしい。

学習の結果として文章に特徴が出てくる。だから、のぞましい回答を引き出すためにどのように訓練させるかについて説明している、のだと思う。ただ「頭の中」がどうなっているのかは、人間同

様、実はまったくわかっていないのである……。

わたしには説明がちよっと難しかった。誤読してたらごめんなき  
い。 [五]

## 『敵前の森で』 古処誠二著



双葉社

'23年4月22日  
1700円+税

戦争は、戦争だけでは終わらない。多岐にわたる影響がその後も続いていく。

主人公は戦後間もないビルマの捕虜収容所でイギリス人

将校から尋問を受ける。いわく、捕虜の殺害と年少者への虐待疑惑がある、と。

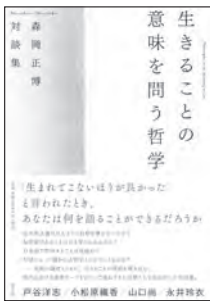
それらの疑惑が生じるに足る何らかの事実があったことには心当たりがあるものの、疑惑の通りの事実があったわけではない。何より、一体どの程度までの事実を語るのが自分や関係者にとって最善なのか。どこに敵が潜んでいるかわからない深く暗い夜の森を手探りで進むようなやりとりを通して、一つひとつがシンプルであるがゆえに複雑に絡み合った特殊な事態が段階的に明らかになっていく。

戦争は、戦争だけでは終わらない。影響はその後の人々にも受け継がれ続いていく。現在の「ビルマ」にも思いを馳せずにはいられない。 [五]

『森岡正博 対談集』

生きることの意味を問う哲学』

戸谷洋志／小松原織香／山口尚／永井玲衣 著



青土社

'23年4月21日

2000円+税

哲学者同士の対話集。森岡氏はずっと哲学をおこなってきた大学教授で六十五歳、対談相手は三十〜四十代の、大学准教授や研究員、純粋な哲

学者や哲学対話者。

わたしは「哲学者」というと大学の教授や准教授を思い浮かべてしまうが、本当はそんなことはない。ポストを与えられた哲学研究者が必ず哲学者である保証はないし、逆に市井の「フツウの人」が哲学者であることもある。

反出生主義や修復的司法（正義）など、生きることの意味や、その上で生きることの意味を直接的に問うてくる学問の領域からの哲学もあれば、とにかくそれを考えなければ生きていけない自覚？のようなものからの哲学もある。

同じ楽器を二人以上で演奏するとき、音がピツタリ合えば音が大きくくなって遠くまで長く響いてくる。哲学も二人以上で考えることをピツタリ重ねることができれば、思考や哲学の響きがやっぱり大きく広がるのだなあ、そんなふうに見える。読んでいてわたしもその響きに参加できたように思える章があるし、一方でちょっと難しくて妬んでしまう章もある。

【石】



『円 劉慈欣短編集』 劉慈欣 リゅう・じきん リウ・ツーシン 著

大森望／泊功／齊藤正高 訳



ハヤカワ文庫SF  
'23年3月15日  
1100円+税

『三體』シリーズで世界中のSFファンを魅了し続けている著者の短編集。すこし分厚い。

「ちょっと長めでかなり贅

沢な星新一」という紹介文を思いついた。星新一は数十年前に大流行した超短編小説「ショートショート」の第一人者であり、生涯に一〇〇〇以上の作品を残したが、今も読み継がれているだろうか。とにかく劉慈欣はどうしてこんなにとくさんの異なる世界が描けるのだろうか。

帯で新海誠が絶賛している「円」は改編されたものが『三體』第一部の一つの章となって収録されている。紹介するにあたり、世界は言葉で出来ているのだということがはっきりわかるといふこと以外には、具体的に何も言いようがない。「素晴らしい」に尽きる。

この短編集でも、緻密さと大胆さ、突拍子もなささと重たい説得力に圧倒され続ける。

【石】

# 編集 後記

宗教部報一〇八号を手にとっていた  
だき、ありがとうございます。

コロナ禍が完全に終息したわけでは  
ありませんが、一歩一歩コロナ以前の  
営みを取り戻そうという気風が感じられるようになりまし  
た。もちろん、コロナ禍で失ったものの中には、取り戻せ  
るものとそうでないものがあります。しかし、人類はこう  
して逆境に何度も立ち向かいながら、今まで営みを続けて  
きたのでしよう。

今号表紙のアクリルスタンド（アクスタ）は、龍谷大学  
内で使われていた飛沫防止用のアクリル板を加工したもの  
です。まさに、コロナ禍の終わりを告げるような象徴的な  
アクスタだと思いませんか？ アクスタ作成のエピソード  
については三五頁からの記事をお読みください。

こうして、日々状況が変わっていく中で、宗教部報は  
龍谷大学の学生・教職員の「今」を捉えて報告する冊子を  
目指して発行しています。もし発信したいことがある学生・  
教職員の方がおられましたら、ぜひ宗教部に「ご連絡ください」。

また、今号から宗教部報はUDフォントを採用していま  
す。UDフォントはより多くの人が読みやすいようにデザ  
インされたフォントです。

YouTube



X



Facebook

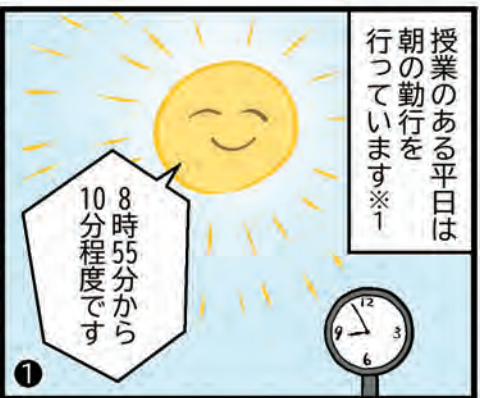


Instagram



それいけ！しゃまぶる！

■朝の勤行あさまじやうは授業前の朝活あさくわつにおすすめ！



※1 深草顕真館・大宮本館・瀬田樹心館にて



※2 大宮は浄土三部経じゆんじゆんさんぶきやうの繰り返し読みでお勤めします



# ま ちがいさがし

2枚の絵の中に、違うところが**10**個あるよ

